

## 翻訳にあたってのヒント

### その 51

## 色にちなんだいろいろな英語

### 第 8 回

#### ● Purple

「紫」は目にする機会が少ない色であり、太陽のスペクトルの中にも紫はない。虹の七色 (violet、indigo、blue、green、yellow、orange、red) の中にも、“purple”はなく、“violet”とあるようにこの場合その色はむしろ「堇(すみれ)色」のことである。また英語の「purple」には、「高貴・権力・豪華」というイメージがある。「堇、紫」の染料は、西欧では紫貝の分泌液から、日本では紫草の根から抽出したという。しかも抽出元がどちらであろうが、気が遠くなるほどの量を要したと言われる。紫貝の場合、2,000 個からようやく 1 グラムの染料が得られたという程だったので、庶民が手に入れることはもともと困難であり、皇帝などの強権を握った者や聖職者などの位の高い人しか紫衣を着用できなかったという歴史が西洋にはある。日本でも、7 世紀初頭以来ほぼ一貫して高位の者のみが冠や衣服の色として用いることを許されたいわゆる禁色である。こういった紫の希少性が「高貴・高位・王侯貴族」などの意味につながっているのではと考えられている。例をあげれば、the purple が「帝位、王位」やそれに準ずる地位、および「司教」などの宗教的地位を指し、be born to the purple が「王家や名家に生まれる」、wear the purple は「皇帝である」の意味である。この一方で、紫は「俗悪、軽蔑、けばけばしさ」というマイナスのイメージも併せ持つ。

- be born to the purple 名家に生まれる、特権階級である
- marry into the purple 玉の輿に乗る、名門の家に嫁ぐ、結婚して名家の一員になる
- purple passage 飾り立てた文章、けばけばしく美文調でつづられた文章（主にイギリスで使われる英語）

#### ● 紫系の慣用色名の一部：

菖蒲（あやめ）、江戸紫、桔梗、京紫、古代紫、紫紺、堇、鉄紺、茄子紺、鳩羽（はとば）、縹（はなだ）、二藍（ふたあい）、瑠璃、ラベンダーなど。

これにて、51 回目完了。